

ニティ間での優劣をつけるような書き方はしないなど、（ヒンドゥー教の社会問題には厳しいが）叙述において価値的序列化を避けていることである。

教科書の検討からは、インドでセキュラリズムを実現するための歴史教科書のあり方とは、インド社会・文化ではヒンドゥー教伝統のみが正統なのではなく多種多様な宗教や生活習慣をもつ人々が存在し、せめぎあいはあってもそれぞれの立場や理由があることを示し、優劣化や批判は避け、中立を保つためにはあえて言及もしないという方法もとることがわかる。つまり、インドでは宗教の公的領域からの排除ではなく、諸宗教を多面的視点で見て、それぞれを等価値の存在であるとするセキュラリズムが要請されているのである。

ケベックの「倫理・宗教文化」教育における 「宗教」の位置

伊達聖伸

カナダのケベック州では、一九六〇年代の「静かな革命」以降の大きな社会変動のなかで、宗教のあり方が変わってきた。

州政府、教会、家庭の関係が再編されるなか、学校教育の役割も変化してきた。一九八〇年代には、カトリックとプロテスティントの宗派教育の選択制に、非宗教的な道徳教育が加わり、二〇〇〇年前後からは、ライシテに基づく統一科目としての宗教文化教育のあり方が模索されてきた。そして、二〇〇八年の新

学期からは、ケベックのすべての小中学校で「倫理・宗教文化」の授業が必修となっている。

「ライシテ」はしばしばフランス独特の厳格な政教分離と考えられているが、ケベックのライシテはフランスのそれとは趣を異にし、公共空間における宗教を積極的に承認する用意があるし、学校教育のなかでも宗教を文化として教えようとしている。またそれは、倫理という規範性ともリンクしている。

本発表では、倫理や宗教という価値にまつわる主題が、教科書でいかに扱われているのかを分析する。とりわけ、輪郭を確定することが非常に困難な宗教という現象が、どのような形でとらえられているのかという点に注意を払う。倫理や宗教の扱われ方は、従来の「道徳・宗教」の教科書とどう異なっているのだろうか。そこには、断絶だけでなく、一定の（逆説的な）連續性もあるのだろうか。

たとえば有名な「よきサマリア人」のエピソードが、カトリックの教科書と倫理・宗教文化の教科書でどのように取り上げられているかを比べてみよう。前者においては、明示的な規範性が打ち出されているが、後者の叙述は、説明的な地平に留まっている。それでも、生徒がそこから行動指針を引き出すしてくることができる可能性は残されている。

「宗教」と「スピリチュアリティ」の関係も興味深い。先住民の宗教的実践は、近代西洋的な「宗教」概念に馴染みにくいためか、しばしば「スピリチュアリティ」と称される。それを「宗教」に組み込む傾向と、「宗教」から区別しようとする傾向が、教科書には見られるのである。このような「スピリチュア

リティ」概念は、一方では、ユダヤ＝キリスト教的伝統の外部にある宗教的事象を示す記号として使われており、イロコイ族やアルゴンキン族の信仰から、経済学者ムハマド・ユヌスの生きざま（バングラデシュのムスリム家庭に生まれ貧困問題に取り組みノーベル平和賞を受賞）までをもカバーする幅広いものとなっている。他方では、キリスト教的な宗派の信仰も「スピリチュアリティ」という言葉で語り直されている面がある。したがって、この言葉には、倫理・宗教文化教育への賛成者と反対者の対立や葛藤が内包されている。

さまざまな「宗教」のあり方を提示する教科書は、各宗教について本質主義的な語りをしている部分もあるが、むしろ興味深いのは、宗教と世俗的な価値観の並列化を進めていることである。また、世俗的な社会生活の中に埋め込まれている宗教的なルーツを発見するような叙述がなされていることもある。これらは現代社会のなかの宗教、あるいは身近な生活のなかで生徒が実際に出会う形の宗教のあり方に近い。このことは、学科の科目名が、「宗教」ではなく、「倫理・宗教文化」であることも関係していると思われる。

間文化主義的な共生の試みが見られることも特徴的である。宗教と宗教、あるいは文化と文化のあいだの壁は、必ずしも乗り越え不可能なものとして提示されるのではなく、むしろ対話的な相互交流のなかで宗教や文化が変容していくことが考慮されている。

もっとも、これらのさまざまなポジティヴな要素がある一方で、問題点がないわけではない。たとえば、他者理解のあり方

はやはりユダヤ＝キリスト教的な読解格子が強いし、近代西洋的な「宗教」概念の相対化も十分とは言えないところがある。

宗教学における分類の問題と教育

藤原聖子

この四半世紀、近代的宗教概念と宗教学に対する批判が盛んに行われてきたが、その上でどう宗教を語りなおすかについては、個々の研究者の専門領域で試みられる事はあっても、最も基礎的な宗教史や比較宗教論（宗教類型論）については未だ十分に議論がなされていない。すなわち、高等教育にせよ中等教育にせよ、教育という実践の場では誰でも避けることができない、各主要宗教の起源・成立・相互比較の語り方に、宗教概念批判・宗教学批判はどう関係してくるのかという問題が突きつめられていないのではないか。

そのような基礎的レベルから宗教を語りなおすには、まずこの問題固有の困難があることを認識する必要がある。というのも、それはポストコロニアル批評が明らかにした民族誌記述の問題、あるいはいわゆる歴史認識問題と重なる部分もあるが、それらに尽きるわけでもないからである。表象する先進国の研究者、その対象となる第三世界の人々の間の権力関係を克服するために、研究者はその特權的立場を離れ、現地の人々と対話の関係を築くべきだと言われるが、原始キリスト教・仏教の歴史については、一体誰が現地の人々にあたるのかは全く自明で